

訪問看護ステーション（終末期領域）でのリハビリテーション

(株)LIBS 訪問看護ステーションおおた

作業療法士 太田崇

※下線はスライドに記載部分です

1. 事業所紹介

当事業所「訪問看護ステーションおおた」は在宅看取りや難病など在宅療養の継続が困難な患者や障害者に対し必要なサービスを提供することで、本人や家族が『本来ありたかった生き方を』が出来るように支援することを目的に平成23年7月に開所した。事業所所在地の愛知県安城市は現在人口約185,000人、高齢化率18.95%。市内に訪問看護ステーションは当事業所を含め7か所、すべて看護師による訪問が中心の事業所となっている。

当事業所の特徴としては同地域の中核に位置付けられる急性期病院に30年務めた管理者のネットワークを活かし、病院や開業医と連携した在宅看取り（昨年度22名のターミナルケア加算を算定。1カ月の利用実人数は平均82名。）を多く実践していることである。

対象者の特徴としてはALSや脊髄小脳変性症など進行性の神経難病と悪性腫瘍の末期患者（特掲診療料の施設基準等「別表7」の訪問は平均月約30名）、気管切開や人工呼吸器など医療依存度の高い患者を制限なく対応している。NICU（新生児集中治療室）からの退院児（0歳から対応）にも10名程度対応している。

2) 当事業所の職員構成

職員構成は看護師人数11名（常勤2名非常勤9名）、作業療法士3名（常勤2名非常勤1名）、保育士1名、事務員1名、運転手1名である。

当事業所の看護師は急性期や回復期での経験者のみで構成されており経験年数も平均で28.6年とベテラン揃いである。

オンコール職員は現在2名（管理者1名を含む）で1週間交代制としており、必要時には交代で緊急訪問や休日訪問に対応している。緊急時に対応ができる限り円滑に行えるよう看護師による担当制は無く、オンコール体制の職員が定期的に訪問し状況の把握に努めている。

なお、平成26年7月より重度要介護者を対象とした療養通所介護と重症心身障害児を対象とした児童発達支援の通所事業を開始しており、訪問と通所の兼務職員が複数名となっている。

2. 事例紹介 ※時間が無いので「活動と参加」についてのみを要約。

重傷者であるため医療のみを配慮した生活になり易い。作業療法士として機能維持だけでなく、最期の在宅生活を「どう暮らす」「どう生きる」のかを本人や家族と一緒に考える。

個別訓練だけでなく目標達成のための支援全般を作業療法士の役割として計画する。フ

オーマル、インフォーマルを問わず連携を積極的に行う。

1：パーキンソン病 (stageV) 気管カニューレ使用状態で常に吸引要する。作業療法の内容は外出のための座位保持訓練とポジショニング、コミュニケーション方法の確立と維持、外出の支援と本の自己選択支援を実施。

2：悪性腫瘍末期 (多発骨転移)。作業療法士は外出時のポジショニングや急変時のコンサート運営会社との調整を実施。

3：悪性腫瘍末期、余命2～3日で退院。作業療法の内容は浮腫軽減のマッサージ方法の指導と実施、コミュニケーション方法の確立。

3. 訪問でのリハビリテーションの現状と期待 ※最後私見です

当事業所では「本来ありたかった生き方」を実現できるよう支援を続けている。終末期においても活動と参加への支援は重要であり、リハビリテーション本来の役割を果たすためには本人だけでなく家族や地域、社会へのアプローチもリハビリテーション専門職の支援の一部として励む必要が高いと考える。

平成26年度・平成27年度の訪問看護に関する改定は重傷者をどれだけ対象にしているかどうかで明暗が分かれた。特に重傷者を対象としない訪問看護事業所かつリハビリテーション専門職のサービス提供が主となる事業所は実質5%の減収となっている。また訪問リハビリテーションでも基本報酬は1.6%の減収であるが他のサービス等との連携を密に行った場合や社会参加(本当の社会参加かというところイマイチ?)につながる支援が行えた場合は増収となる。なお当事業所は重傷者を開設時より主な対象として運営してきたこともあり、全体では2.5%の増収となっている。

訪問看護や訪問リハビリテーションから提供されるリハビリテーションは、これまでの軽症者永久継続型ではなく、重傷者を対象とするか活動と参加を達成できる支援に力を注ぐか、役割の選択を迫られる時代となった。

また活動と参加がキーワードとなっているが、時期が来たから無責任に終了するのではなく、近隣のデイサービスや地域住民主体の活動(サロンなど)に対して、リハビリテーション専門職の関わりをより積極的に行い、地域の受け入れの間口を広げて初めて円滑なエンドゴールの設定が可能になると考える。

リハビリテーション専門職の中でも地域に近い存在である訪問看護や訪問リハビリテーションに在籍するリハビリテーション専門職の役割としての自覚と働きかけに期待したい。